

**巻頭言：木づかいしても木づかれしないために
～でも違和感あるもの～**

木造の公共施設がふえても、最近では木疲れしない。昭和 60 年代に一生懸命建てた建物の中には、建物の内側全てに木を張って、暗く、狭い感じで木づかれするものが多少なりともあった。伝統的木造の和室の構成比率（プロポーション）を見ると壁には途中に長押があり、鴨居と対称をなしていた。床は畳で天井は天井板である。襖や障子の木枠の中は白や茶色の紙である。外廊下は縁甲板である。物の本によると正座して座った時に目線の位置の長押が空間の広がりを持つ高さに少しの巾で作られているとあった。壁の白さと好対称で一對となっていた。このように、床・壁・天井全て、木で覆われてないことが木の良さを引き出していたのである。最近では、これが「木づかいしても、木づかれしない」構成比率になる設計が多くなったのはうれしい限りである。

それでも、違和感のあるものがある。国有林でも建物は木造にするが、トイレの内装や仕切り、〇〇室のようにドアの上につくサイ・ボード・ロッカー、外にいくと車庫・プレハブ倉庫等は、統一感の欠ける既製品がカタログから飛び出したようである。ここにくると、建物の設計者のようでもあるし、そうでないところもある。そもそも、こうした品物の地域対象品が無い。仮に特注すれば価格も高くなる。価格合理性の説明が難しい、これは、これからの課題の一つである。まあ、備品は古い建物にある物を有効利用して使っているのも一因だが、買い換えの時には同じ問題が直面する。こだわりのリーズナブルな既製品の開発手法を考えましょう。

トピックス 1：「㊦㊧木曽ひのき」の本格的販売の開始

(マルコウマルコクキソヒノキ)

～今後の評価を上げるために～

高齢級人工林のブランド化を目指して、「㊦㊧木曽ひのき」の本格的丸太販売が開始された。

丸太の木口へ刻印打ちされた物件が委託市場で原木市にかかり始めて2ヶ月となり、徐々に浸透し始めている。これから秋以降が本番を迎える。刻印の打たれる丸太は少なくとも隣接二面無節材としていることもあり、10万円／m³を超える物件も少なくないし、応札枚数も10枚近くに達している。（直近では、5メートル・44センチメートルに26万円／m³の価格で落札されている）以前、材齢別の価格を読み取って見たら、明らかに80年生以上は価格帯が異なることが判明した。戦後の造林の最盛期が昭和30年代、昭和40年代とすると、昭和30年代でも60年には達していない。80年生となると極めて量的には少ない。現在大量に出材される原木は、戦後造成した人工林からの出材であり、いわゆる一般材（並材）が多い。もちろん、篤林家の山にも100年を超え、200年の山も存在するが、大量には存在しない。ここ、木曽谷の人工林ヒノキは80年生以上が多く、120年生から1年刻みで大量の面積と蓄積を有している。これは、戦前の御料林が皆伐、一斉造林した経緯に基づいている。下図を見れば、木曽谷の山に二つのピークを持つ山が存在することがわかる、いわゆる連続性があり持続的供給が出来ることがわかる。こういった分布をしている場所は日本全国では希である。今までのブランド化は東濃ヒノキ・天竜スギ等地域名ブランドであって、地域と林齢を組み合わせたものは存在しない。

用途としては、寺社仏閣用、見え掛かりの柱用、内装材用、フリッチ用と様々であるが、ヒノキ価格の下落により篤林家の人工林ヒノキの高齢級材の伐採意欲減退の中では貴重であるし、今こうした材の供給がなければ、こうした高齢級材を利用する業界が存在し得なくなる。加工する企業がなくなれば価格を評価してくれるところもなくなる。

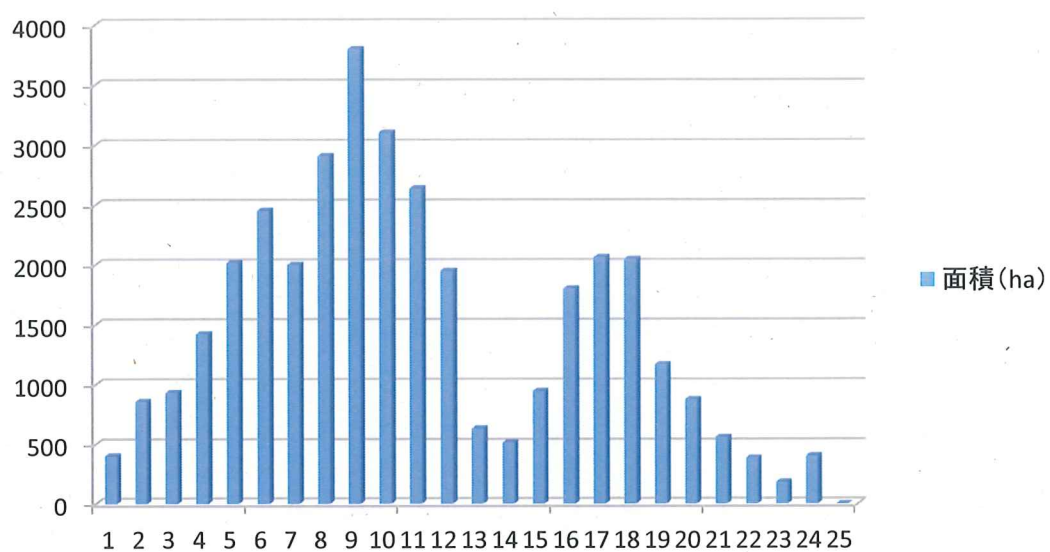
林齢構成の平準化ができている国有林だからこそ続けていく覚悟である。

加工した製品も製品市場に出品されることとなり、既に「㊦㊧木曽ひのき」をシールとして独自の取り組みが始まっており、幸先は好調である。

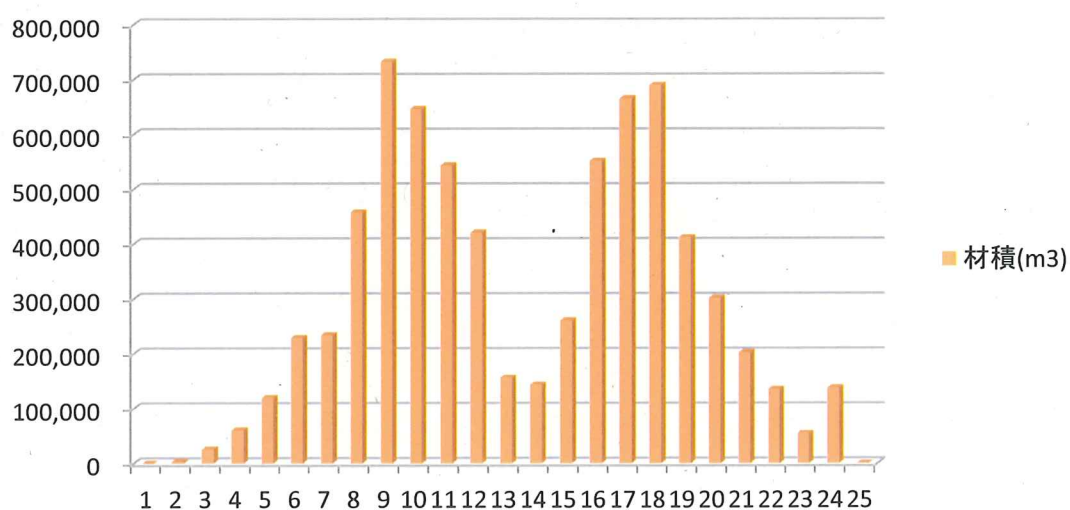
今後は、林齢入りの原木の証明書の発行も考えているところである。更に、昨年実施した愛知県段戸国有林の100年生以上の人工林ヒノキについても取り組みを強化していく考えである。

下図に段戸山を管理する愛知森林事務所の国有林の林齢分布を示すが、ここでは平準化されて素晴らしく、法正林思想が生きづいている。

木曾谷齡級別人工林面積



木曾谷齡級別材積

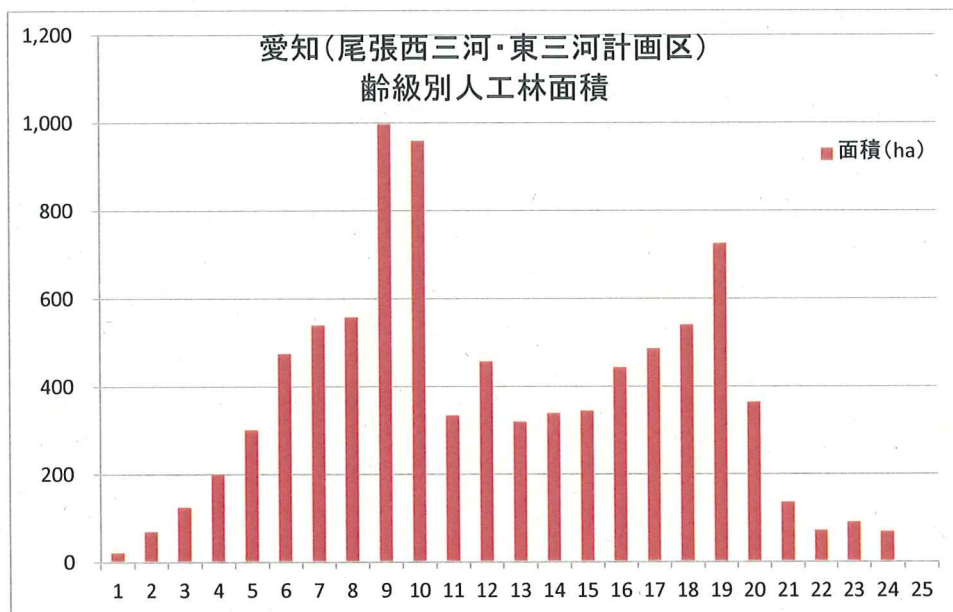


愛知事務所(尾張西三河・東三河) 人工林齢級別面積・材積 (H25.4.1樹立DB)

[齢級別面積]

齢級別	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
面積(ha)	21	70	125	199	301	474	539	557	997	959	334	457	319

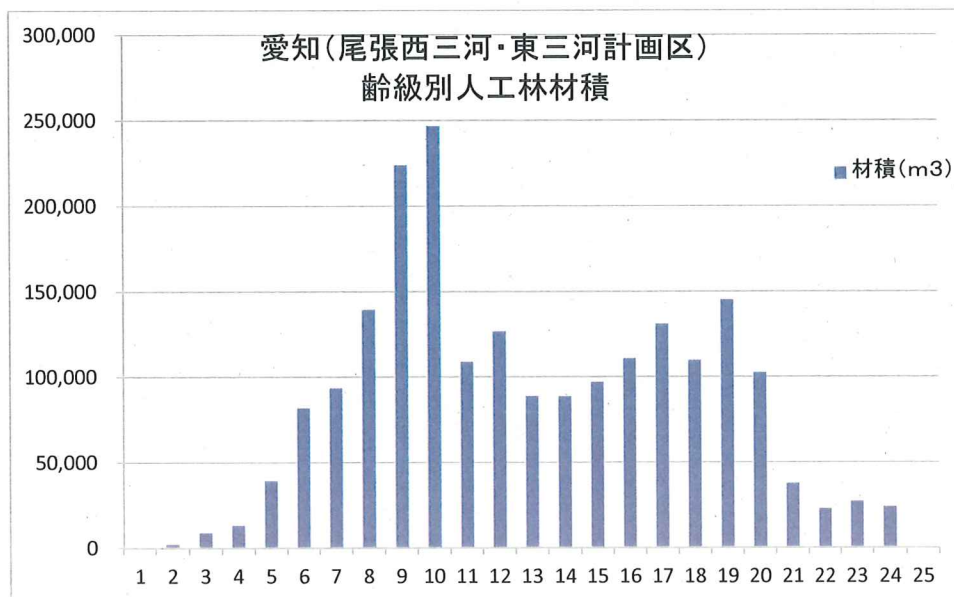
14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	総計
339	344	443	485	540	725	364	135	72	90	68	1	8,956



[齢級別材積](点生木除く)

齢級別	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
材積(m ³)	0	2,063	8,776	13,205	39,138	81,719	93,409	139,263	223,757	246,494	108,704	126,663	88,710

14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	総計
88,582	96,915	110,683	130,851	109,783	144,928	102,322	37,602	22,748	27,109	23,912	159	2,067,495

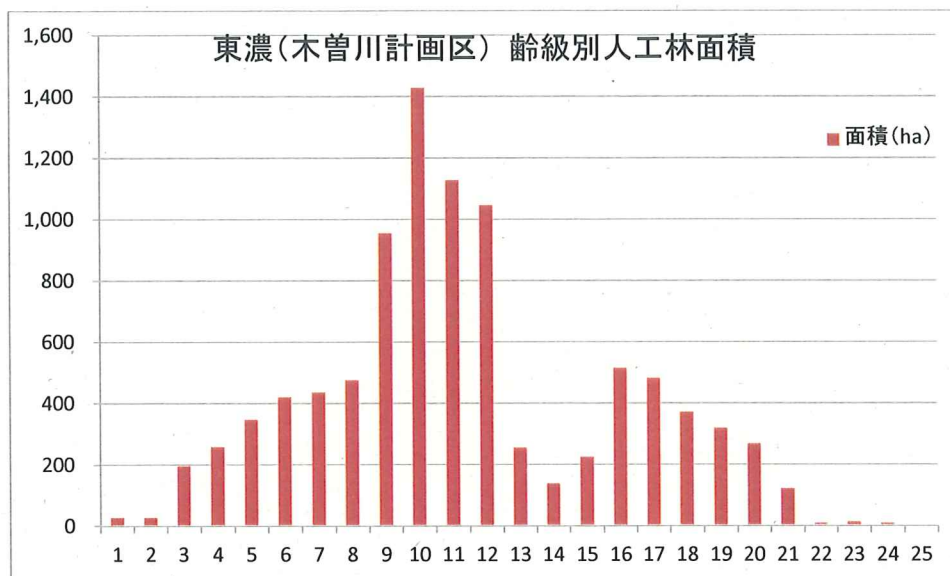


東濃署(木曽川計画区) 人工林齢級別面積・材積 (H25.4.1樹立DB)

[齢級別面積]

齢級別	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
面積(ha)	27	26	194	258	346	419	436	475	954	1,428	1,126	1,046	254

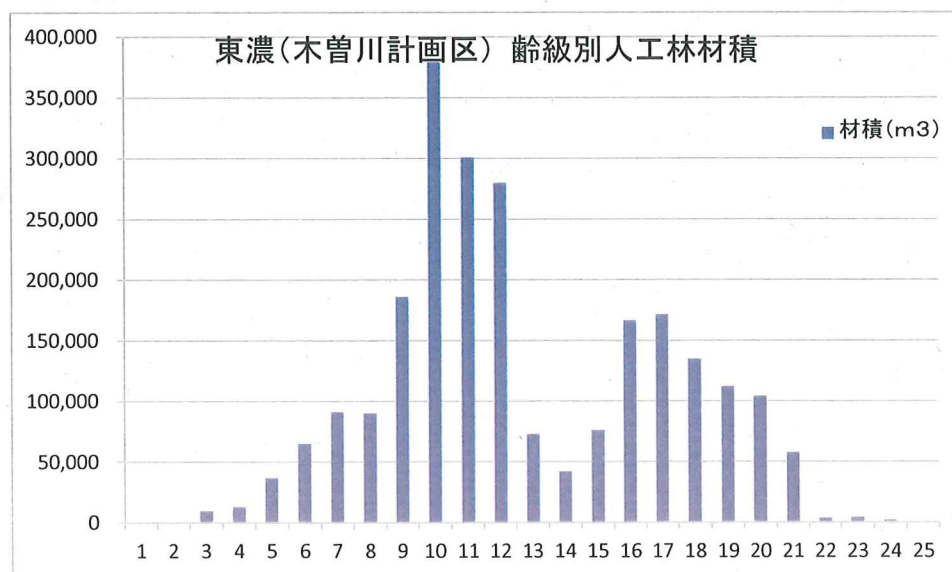
14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	総計
137	224	514	481	370	319	267	121	8	12	8	1	9,452



[齢級別材積](点生木除く)

齢級別	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
材積(m ³)	0	0	9,641	13,113	36,783	65,051	91,061	90,127	185,890	379,184	300,862	279,981	72,961

14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	総計
41,991	76,090	166,336	171,325	134,694	112,028	104,024	57,615	3,494	4,333	1,999	76	2,398,659



トピックス 2：自給率 50%以上を目指した合板業界の課題

木材利用ポイントが注目を集めているが、その中で注目されるのが床材の製品が大きく変化していることである。複合フローリングといわれる合板・MDF 基材に薄板を張った製品を各社とも主力商品としてきたが、ここにきて大手建材メーカーは、こぞって国産材合板を基材として、従前より厚い板で国産広葉樹を張る商品を販売している。また、国産針葉樹を張ったり、ムクフローリングの商品も手がけ始めている。今では、家の中で木材が最も目立つ面積を占めるのが床である。その意味では情緒的ではあるが全体の雰囲気醸し出すにはインパクトがある。合板業界は構造用合板の国産材化は大きく進んだが、床板基材や型枠合板が外材一辺倒だったこともあり、合板全体での国産材率は極めて低い。自給率 50%以上を目指す森林・林業基本計画においても合板業界の最大のマーケット課題とされていた。

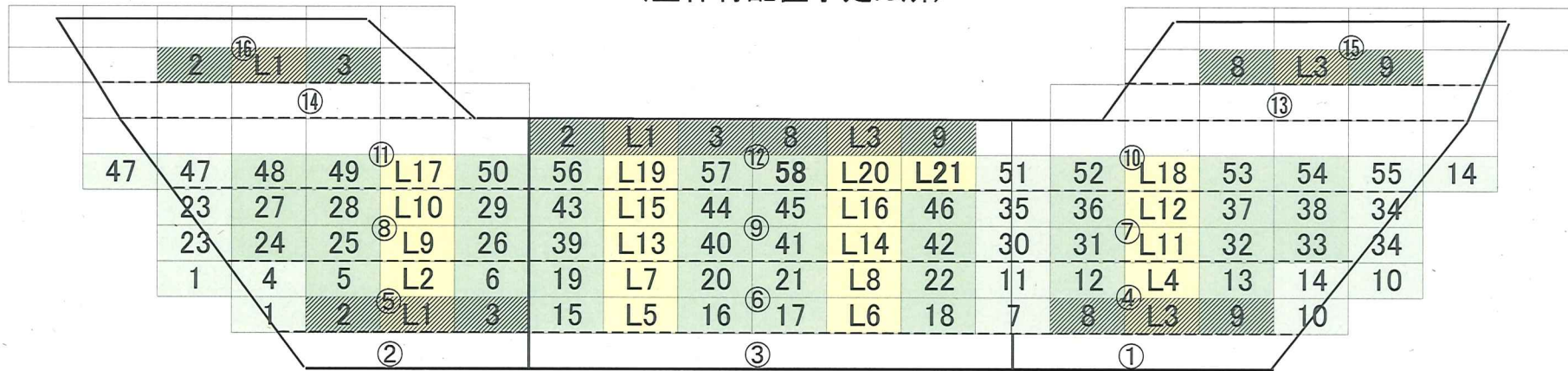
ここにきて床板基材の利用が進んできたのは一歩前進である。

薄板にも〇〇チェリー、〇〇バーチ、〇〇オークではなく、クリ、サクラ、ヒノキの名前が登場しており、今までクリであれば 4 メートルの土台向けの丸太が用材としての価値であったが、径級・長級の出材の見直しをすることに必然となってくる。採材基準の変更は売れる物を生産するという基本である。

家具はメーカーが異なるが、システムキッチンやバスは建材メーカーの範疇である。是非そういった商品にも、このような国産材を中心とした材料をベースとした開発を望みたいものである。和室用の換気ファンをスギの柱目で作っているカタログも見したが、そうした細かいところにも使ってもらいたい。（さすがに、換気ファンは大工さんで作る人はいないだろう。）

次のターゲットは、型枠合板である。我が局でも型枠合板の施工試験を大学、県と共同で試験を行うこととしている。（施工試験概要は別紙）着実に 10 年後に目を向けて一歩一歩実績を出すのみである。

NO.2コンクリート谷止工 副ダム
(型枠材配置予定力所)



- 県産材合板型枠(45枚)
 - 県産材合板型枠(加工13枚)
 - L 南洋材合板型枠(21枚)
 - 追跡調査予定力所
 - ①~⑩ コンクリート打設ブロック番号
- } (58枚)

課題 1：サマースクールの創設の必要 ～将来のための投資のため～

県産材の利用推進会議に行くと、〇〇県建築士協会・建築事務所の協会の方々と会う機会がある。その中で、建築士の方々は「自分たちが学生の時には木造の授業は全くなく、卒業後独りで学んだ」と口々におっしゃっていた。30年近く木材関係に携わってきた中でも木構造の委員会等に呼ぶ先生にあまり変化はなく先生の数に限られていた。加えて、木構造を教えらるる大学もその先生のいる大学に限られている。教えてくれる先生がいないと学生に学ぶ機会はない。一級建築士の試験問題にも木造や材料としての木材の問題は極めて少ないので、合理的に考えれば学生が力を入れて勉強しなければならない必然性はないだろう。また、木造に詳しい先生にも各々より詳しい分野があつて全く、同じではない。結局幅広く学ぶ機会はずっと得られにくいこととなる。しかし、今ここにきて、様々な大学に木造を教える先生が新たに登場する時代となってきた。新たな時代に始まりともいえる。

大学のスポーツ系の部は、よく夏には涼しい信州や北海道で合宿をして、他大学との練習試合を行う。菅平のラグビーとかは極めて有名である。是非、学生が自由に参加できるサマースクールを実現したいと夢を持っている。大学予備校でも夏期講習は、他の予備校生も現役生も参加自由だった（ちょっと違うかな！）その際には、材料としての木材の分野も合体すれば、なお役立つのではと思われる。国際化なのだろうが、古い世代には何を学ぶのか判らない、横文字で学際的な学科を作るのが盛んだが、最初から学際分野からではなく、一度興味のわく分野をまず見つけることが重要だろう。将来の木材、木造への投資が求められている。

今年の夏は暑かった。涼しいところでサマースクールを実施したい。少し違うが、森林林業関係の別のサマースクールがプレスされているので、参考までに下記に示すこととする。それにしても、今年の夏は暑い・・・。

平成 25 年 8 月 5 日

報道関係各位

「Wood in Culture～木のある文化へ」事務局

サマースクール「Wood in Culture～木のある文化へ」

山梨県小菅村で開催します！

木と人の関わりは、伝統文化はもとより、今日の日常生活、そして地球環境に至るまで、広範な時空間に関連した多様な文化を生み出しました。自然と人の共生が豊かにあり続けるためには、木と人の文化の未来を思い描ける若者が必要とされています。

このような中で、私たちは、縦割りの専門教育を超えて、広い視野を持った「木の文化」の担い手を育てることを目的とし、学生向けサマースクール「Wood in Culture～木のある文化へ」の構想に至りました。ここで学生たちが専攻を超えて集まり、様々な講師との交流をとおして木の文化の多様性について語らい、そして自らの考えを発信する場となることを理想としています。

記念すべき第一回のサマースクール「Wood in Culture～木のある文化へ」は、地上の生命にとって最も基本的な「水」をテーマに選び、関連する幅広い専門分野から講師陣をお招きして開催することになりました。人間は森から流れ出る水によって支えられ、また、木でつくった道具や建造物を介して水と接することで様々な文明をつくりあげてきました。時に、水は文明を飲み込むこともあります。

今夏、学生たちが東京都の水源地、多摩川源流の村・小菅に集い、樽づくりや造船、建築や都市など、「木と水と人々の関わり」の多様性を学び、これからの文化について考えます。

- | | |
|---------|--|
| 1 日 時 | 平成 25 年 8 月 8 日(木)13:00 ～ 10 日(土)16:00 |
| 2 場 所 | 山梨県小菅村 多摩源流大学他 |
| 3 プログラム | (別紙) |
| 4 そ の 他 | このサマースクールは、国土緑化推進機構の「緑と水の森林ファンド事業」のご支援をいただいて実施しています。 |

連絡先：サマースクール「Wood in culture～木のある文化へ」事務局

網野禎昭(080-6910-1109)

E-mail:woodinculture@gmail.com

(別紙)

プログラム

	8月8日(木)	8月9日(金)	8月10日(土)
8		朝食	朝食
9		830-1100	
10		エクスカーション 「源流の森を歩く」	900-1030 「木の中の水」 東京大学・有馬孝禮
11		11:00-12:30	11:00-12:30
12		「木造船の文化」(飯) 東京海洋大学・庄司邦明	「水都東京の成り立ち-歴史とエコロジーから読む」 法政大学・陣内秀信
13	1300-1400 開講式	昼食	昼食
14	14:00-15:30 オープニングレクチャー 「源流学のすすめ」 東京農業大学・宮林茂幸	1330-1500 「水と建築・材料との結びつき」 東海大学・石川廣三	1330-1500 クローシングレクチャー 「森と水の国を支える生態系の力」 北海道大学・中村太士
15		1530-1700	1500-1600
16	チェックイン/入浴	「命の水と樽」 サントリー・三鍋昌春	開講式
17			
18	1730-2000	入浴/夕食	
19	ウェルカムパーティー 「森・食・水」		

講師紹介

「源流学のすすめ」 東京農業大学 森林総合科学科教授 宮林茂幸先生

「木造船の文化」 元東京海洋大学 教授 庄司邦明先生

「水と建築・材料との結びつき」 東海大学 名誉教授 石川廣三先生

「命の水と樽」 サントリービジネスエクスパート(株) 品質保証本部シニアスペシャリスト
三鍋昌春先生

「木の中の水」 東京大学 名誉教授 有馬孝禮先生

「水都東京の成り立ち-歴史とエコロジーから読む」 法政大学 建築学科教授 陣内秀信先生

「森と水の国を支える生態系の力」 北海道大学大学院 農学研究院教授 中村太士先生

課題２：木箱は今どうなったか？

～復活の可能性はあるか～

子供の頃には。家には木箱がたくさんあった。一番大切な箱は茶箱だった。次は果物の箱が多く、みかん箱、りんご箱があったし、佃煮の箱や、魚箱もあった。物流が発達してスーパー等で小分けにして買える時代が来て、箱買いする必要もなくなったことも大きな理由だろう。また、箱をバラバラにすればストーブで燃やせたが、今では分別してゴミに出さなければいけない、手間もかかる。

更に、寿司折り箱、菓子折り箱もなくなり、かつてあった木箱折箱協会の名前も聞かなくなった。最後まで残っていた魚箱も発泡スチロールに取って代わった。平成の初めに位までは魚箱はまだ多く、魚を魚箱に入れて、そのまま量ることから水を吸う木が好まれていて、パルプ・チップ材からちょっと板になる材を挽いて納める工場も多かった。魚種によって大きさが異なることから、特定の魚が大漁の場合は残業して作っていたものである。発泡スチロールの処理費もかかるので、トータルコストでは対抗できると思うんだが・・・。

肉や団子等のお菓子、たこ焼き等の水分の多い食材の包装に使われていた経木（木を薄くスライスしたのも）を見かけなくなった。そのほとんどはシートがはられた紙が多くなった。

復活の可能性はあるのか。大量に買って保存しなくなった物は中々難しい。今でも使われているのは贈答用の素麺の桐箱位になるので、贈答用としての可能性はある。お土産用としては、ミルクキャラメルのような厚経木も同様である。積木やパズルもプラスチックから木材へ回帰しているから、この箱もある。とにかく、しばらく箱として他のように使って燃やせるようなライフスタイルになればいいだろう。

それに加えて、前述した発泡スチロールの処理費のようにトータルコスト考えるとともに、海は山の恋人を実践して、裏山の利用を進める必要がある。最も可能性があるのが、野菜等の集荷用の鉄の大型の箱である。タマネギ等が鉄の箱の角に当たると痛みが生じて、品質上出荷できなくなる。この内側に傷まないように木を張って対処することが求められている。パレット、ダンネージと同様の効果があるものはまだまだあると思う。このように困っているニーズに合わせた製品は伸びるのではないか。

永続的に使われているカマボコ板のように復活出来るところは復活したい物である。（カマボコ板の地元材利用も実は大きな課題で、神奈川県小田原市が取り組んでいる）

需要拡大シリーズ：需要開発は戦前も同様 ～戦前の需要開発の記録から～

御料林時代の需要開発の記録がある。

丸の内商工奨励館で建築博覧会に販路拡張を目的として出品している。この中で次の記述がある。「ヒノキ30センチメートル以下小径材宣伝のため、左の十余品を出品せしめたが、足を止めるものすこぶる多く、相当の成績をあげること信ずる」

また、三越本店において森林文化展覧会に出品している。次の記述がある。「和室は実用的建築の例を示し、洋室はヒノキの小切短材を利用した寄木張を紹介す」

次に銀座西三丁目建築会館内に常設陳列場を設け木曽ヒノキ新用途開拓の展示を行っている。

「木曽ヒノキの小切短材を丁度屋根板を取る如く長8寸、幅2寸、厚さ1分5厘の桎目板を取り、ベニヤ材（厚さ1分5厘）に市松、網代等の模様寄木張とする。これを洋室の天井、腰羽目板、床等に施工する時は甚だ優雅高尚の気品を発揮し和洋折衷の落ち着いた感じが出て良いものである。仕上がりも大體檜の寄木と同じ値ぐらいである」このように木曽ヒノキであっても短尺小径の材の需要拡大に努めていて、洋室向けに既に取り組んでいる。

もう一つ、秋田杉の酒樽用材の取り組み記述がある。

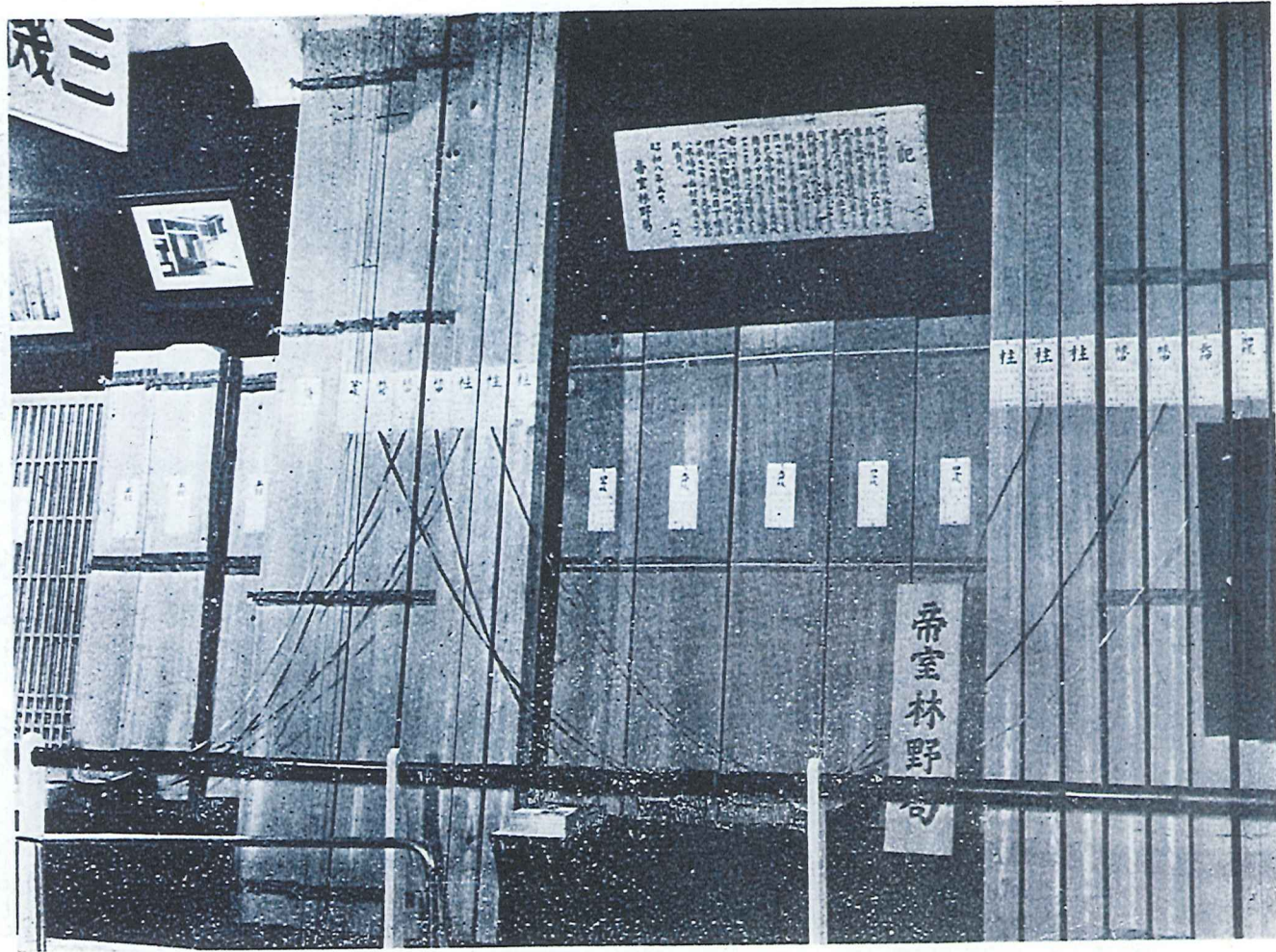
昭和4年から5年にかけて、3回の試験を行っている。この中では「酒樽に対する樹種選択方法及び処理方法たる葉枯材及び立皮ハギを18万m³を伐採し世に送り出すことに決定いたしました」、「従来優良なりとせられた芦野、肥後、鳥取物に何ら遜色ないばかりか、より優良であることが立証せらるに至ったのであります」＊原文の中では吉野ではなく芦野と記されている。

優良木であっても、全てが世の中で評価を受ける理由ではない。小切短材、小径材の販路拡大は必要だったのである。この時でも和室に拘わらず、洋風建築の内装用に向けて需要開発している。頭を柔らかくしなくてはならないんだなあ～。

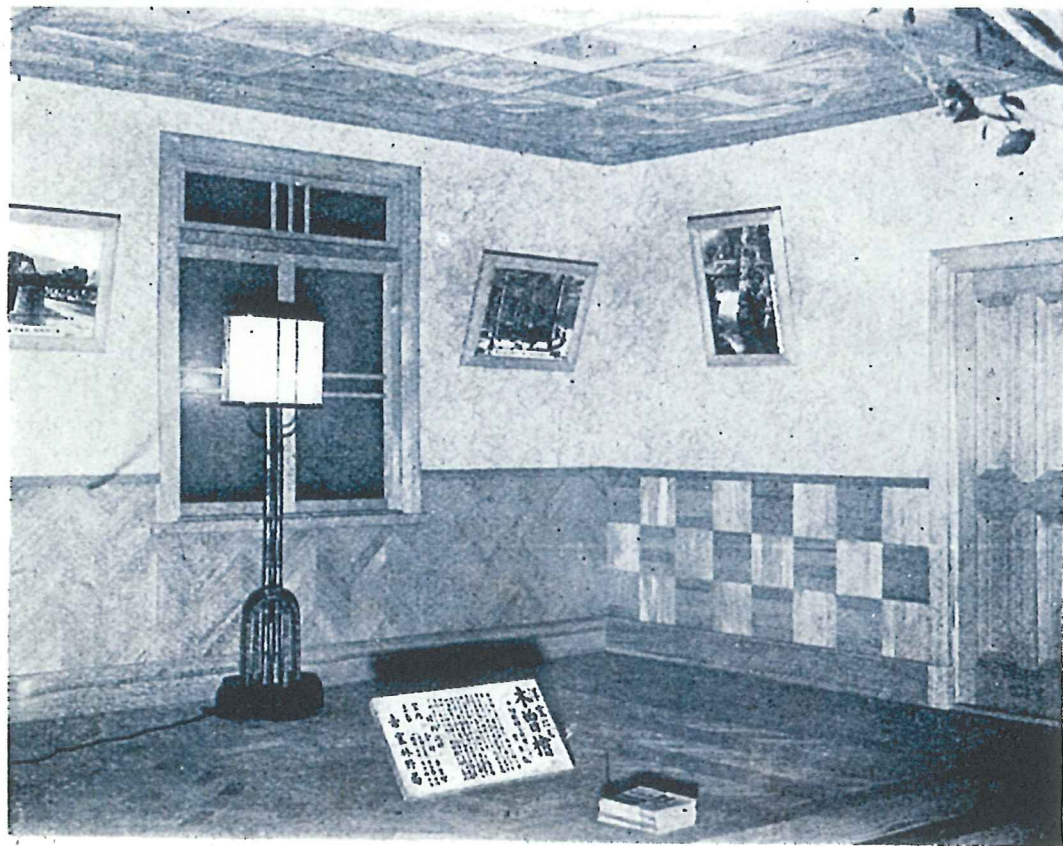
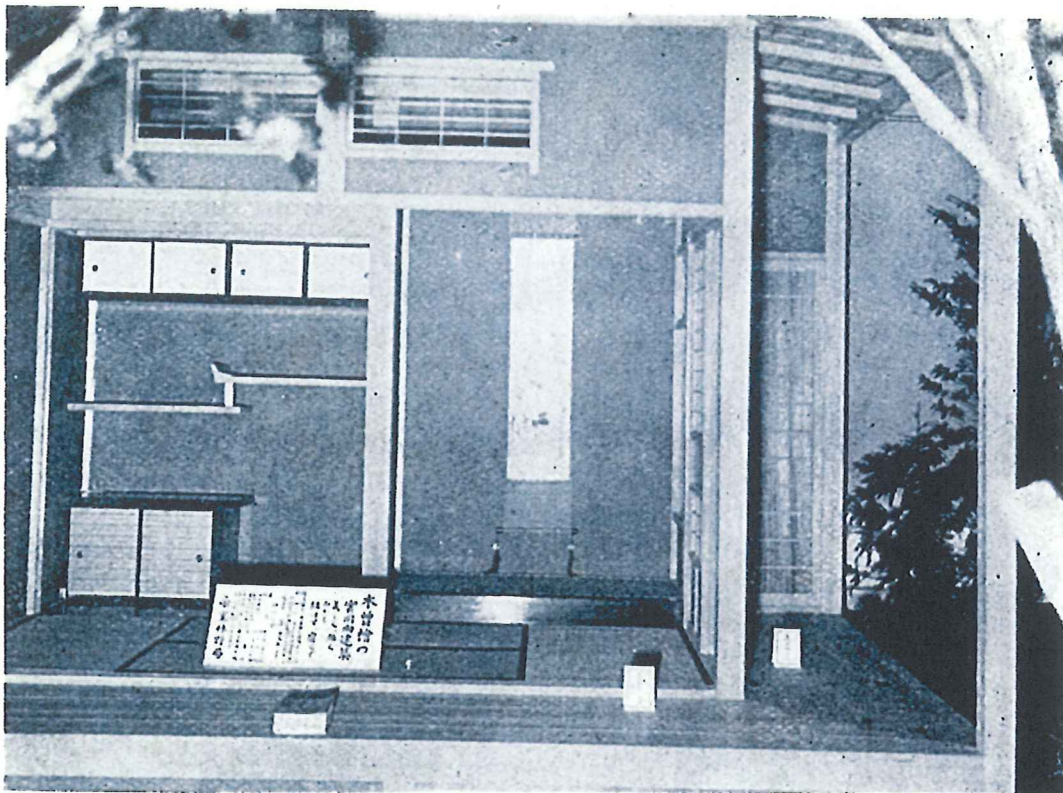
このように、三大美林の内の二つである木曽ヒノキ・秋田天然スギであっても需要拡大に戦前から鋭意取り組んできたのである。

建築博覽會出品物

ヒノキ 柱・縁巾・平割・板割・敷居・長押・廻縁・格子戸・木取を例示
 したる圓板四枚
 サハラ 天非板・四分板
 外に額面二枚(木曾ヒノキ林用)
 寫眞スタンド一基 額面同様の寫眞貳拾餘枚

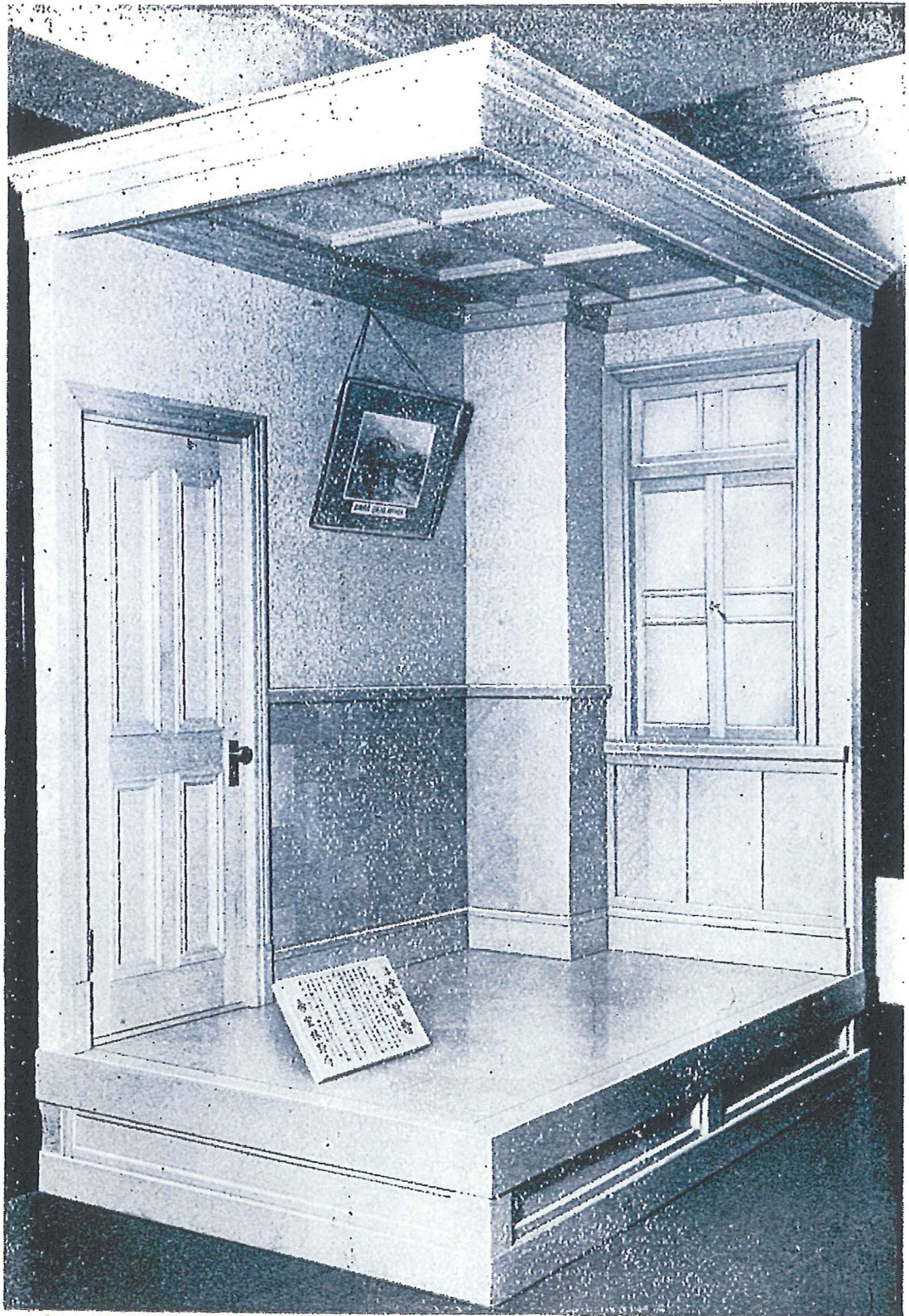


東京府立商工獎勵館・建築資料協會主催の下に、自五月廿二日間、至六月十日間、東京市麹町區丸の内商工獎勵館に於て、建築博覽會を開催せられた。この會は建築材料を主とする各種資料を陳列して比較研究に便し、その改善發達並販路擴張に資するを目的とし、出品點數一九八、參考品五四點の多きに達し盛會裡に閉會した。當局に於ては、主としてヒノキ三〇Cm 以下小徑材宣傳の爲、豐住出張所をして左の十餘品を出品せしめたが、足を止むるもの頗る多く、相當の成績を挙げ得たことと信ずる。



林森るたれさ催て於に店本越三京東迄日五十りよ日一月九 明説眞寫
 は室和。室兩洋和の用使椅會木るせ品出りよ局當に會覽展化文
 を張本寄たし用利を材短切小の椅は室洋し示を例の築建的用實
 。りな室洋が左室和は右てつ向し續連相は室兩。す介紹

張木寄たし用利を材短切小の檜曾木



の局當るけ於に場列陳設常會協料資築建、内館會築建目丁三西座銀區橋京市京東
切鼻の檜曾木るけ於に場市京東且め爲の拓開途用新の檜曾木に築建風洋、物品出
板根屋度丁を材短切小の檜曾木、がるあで本見工施張木寄たれらみ試め爲の用利
板ヤニベリ取を（る限に目柱）板目柱の厘五分一厚、寸二巾、寸八長く如る取を
、非天の室洋を之。るすを張木寄に様模の等管矢、代網、松市に、（厘五分一厚）
い着ち落の裏折洋和し揮發を品氣の尙高雅優だ甚はきとるす工施に等床、目羽腰
。るあで位値し同と木寄の桤體大もり上仕。るあでのもい良て出がじ感た

先進企業紹介

○日本土地山林（東京都品川区）

明治時代に荒廃地に植林を始め山林経営を開始する。場所は兵庫県朝来市にあり、一流域全ての経営として、軌道を敷き働く人の子供の学校を併設する等大規模経営にたった。

所有山林は、現在約 1,860 ヘクタールあり、人工林率 62 パーセント、山林経営として、高機能林業機械を使った間伐を行う一方、木材流通加工業、住宅建設も手がける。

観光事業として、伊香保グリーン牧場を、文化事業として有名な原美術館を有する。1,988 年に開館した伊香保にあるハラミュージアムは著名な建築家磯崎新氏の設計で木造美術館の先駆け。

○中西木材（福井県越前市）

集成機製造、住宅建築から木のインテリア雑貨まで扱う幅広い企業。最終用途を限定しない銘木類耳つき板のムク材を販売する。また、木のスプーンやフォーク、ナイフ、小皿などの小物やサンタ、ウサギ、キリン等の木のおもちゃを販売する。更に、針葉樹・広葉樹の薪の販売も行う。本業の県産材製造、木造住宅はこだわりを持って行っている。

ホームページも充実している。

編集後記：

お寿司屋にいくと、大きな茶碗に魚偏の漢字を網羅して書いたものがよくある。もちろん魚偏と同様に木偏の漢字もものすごい数がある。この漢字を網羅したのは、大阪にある中川木材産業の社長であった故中川藤一氏が自費出版した「木偏百樹」があり、お読みになりたい方はご子息の社長さんに連絡を取れば在庫があるかもしれない。日本経済新聞に紹介される等四度にわたり増版したと記憶している。

魚偏には、季節を表す漢字を加えると鰭で「さわら」、鰯で「かじか」、鯨で「このしろ」で残念ながら夏がない。木偏で同様に季節を表す漢字を加えて見ると、椿で「つばき」、榎で「えのき」、柊で「ひいらぎ」となる。魚に夏がないように、木偏に秋がないかと思いきや楸で「あかめがしわ」となり、季節が完成した。有名なのは、櫛の「ぶな」で、水分が多く乾燥が難しく、腐りやすかったため、木で無いと表されている。

木偏にの大きな特徴は、下や上に木のつく漢字である。栗（くり）、桑（くわ）、李（すもも）、杏（あんず）、梨（なし）、棗（なつめ）である。何となく実のなるは木かなと思うが、木偏が偏にある柿（かき）、桃（もも）、梅（うめ）もあり必ずしも共通でない。もう一度考えてみよう。